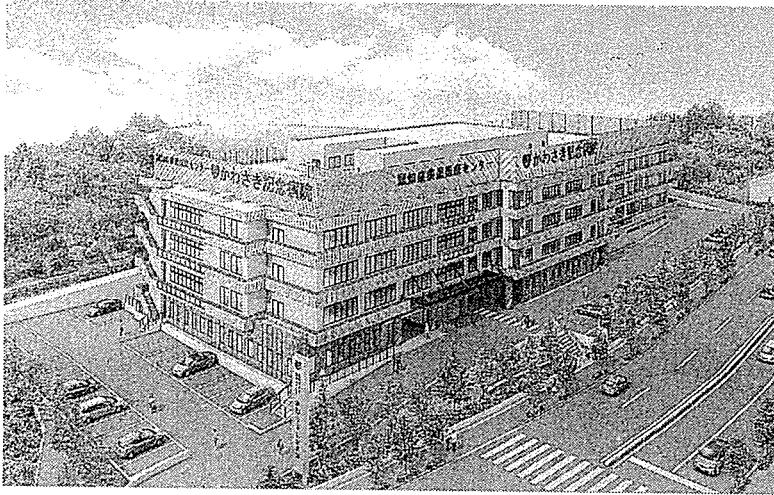


宮前に認知症専門病院

来年5月オープン目指す



「ユニット型」病床導入

短期入院増やし地域連携

認知症治療専門病院「かわさき記念病院」が2014年春、川崎市宮前区潮見台にオープンする。開設するのは、菊名記念病院などを運営する横浜メディカルグループ（YMG）傘下の医療法人花咲会。日本ではまだ数少ない、生活空間を比較的小規模に区分けた「ユニット型」の病床を導入し、重症の認知症患者が入院して治療後、できる限り短期間で住み慣れた地域や家族のもとに戻す病院を目指す。

（西郷 公子）

厚生労働省の調査によると、入院中の認知症患者のうち7割が精神科病棟に入

「社会的入院」が大きな課題となっている。こうした状況を踏まえ、同病院はフロア設計にも配慮。長い廊下に個室が並ぶ「回廊型」ではなく、小規模の区画に分け、医師や看護師などスタッフを認識しやすい「ユニット型」を採用する。北欧などでは一般的という。

施設は、敷地面積約8800平方メートルに5階建て総床面積1万1800平方メートル、2～4階の計300床を6病棟に分け、各病棟ごとに16～18人の三つのユニットを配置。ユニットごとに作業療法なども行えるテイルーム、病棟ごとに機能回復訓練室などを設ける。スタッフは医師10人を含む看護師、作業療法士、精神科ソーシャルワーカー、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士など総勢220人。2月上旬予定で2014年3月竣工、同5月の開院を目指す。

このほか認知症の外来を行い、かかりつけ医や地域包括支援センターなど福祉関係者との連携、患者家族への啓発事業にも力を入れる。診察室とは別に地域連携室、個別相談室、研修室を設けて対応する。将来的には身型認知症疾患医療センターの認定を目指している。

「本来なら患者10人ぐらいのユニットにしたかったが、敷地の問題などさまざまな要因で難しかった。しかし、可能な限り短期入院の割合を増やしたい」と同病院開設準備室の国井弘善事務長は話している。

かわさき記念病院の診療責任者に就任予定の大倉山記念病院精神科物忘れ外来部長の高橋正彦医師（50）は「認知症患者も住み慣れた場所のできるだけ長く暮らせる社会を目指すべき」と話す。そのためにも「（入院治療の）病床はあくまで外来を支えるという位置付けで、在宅をサポートする福祉職や行政、かかりつけ医と連携した外来治療があつて初めて可能になる」と指摘、社会全体の環境整備

「かわさき記念病院」診療責任者就任予定 高橋正彦医師

社会全体の理解必要

の必要性を訴える。高橋医師はかつて、福祉先進国スウェーデンで4年間、認知症治療の最前線をつぶさに見た。「福祉先進国では大きな病棟はなく、10人以下のユニットで人間関係が認識しやすい環境をつくっている。新病院も10床以下にしたかったが、日本の医療制度では20床弱が限界。それでも落ち着いた環境になると考えている」と指摘する。

すでに地域との連携や専門職の研修、啓発事業にも取り組む高橋医師。「認知症が軽い時から介入する必要があること、せん妄や徘徊などの問題行動も対策によってかなりのレベルで予防できることを知ってほしい」と話す。

開院に向けて、同医師は「中等度の症状なら1人暮らしが可能なケースもある。いずれにしても、本人を支えるシステムとして専門職が中心になったケアやサポートのマネジメントが重要ということ」を伝えていきたい」と抱負を語った。

（西郷 公子）